

お産&子育てサポート

発行・編集
お産&子育てを支える会
代表 齊藤 智孝
編集者 東直美
TEL 090-7103-2240



女性 0人 議会14%、1人 以下は38%

2022年11月1日時点で都道府県と市町村議会全ての中で女性議員が1人もいない割合が14%で、1人しかいないを含めると38%になるという結果が2月19日付けの中日新聞に掲載されていました。世界経済フォーラム発表のジェンダー格差で2021年に120位(前年度は121位)の日本ならではの割合といえます。



男女共同参画社会とは、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」(男女共同参画社会基本法第2条)と定められていますが、果たして日本がそのような社会になるときがやってくるのでしょうか? ちなみにジェンダー格差が少ない1位から5位までは、アイスランド、フィンランド、ノルウェー、ニュージーランド、スウェーデンで、お隣の韓国は102位、中国は107位です。1990年の1.57(出生率)ショック以降、日本政府は少子化を止めるために、様々な法整備や施策を実施してきました。この約20年、出生率は低空飛行で維持はできていますが、解決にはほど遠いのが現実です。「子どもを産み育てる」現実を知っている女性議員がもっと増え、政治に参加すれば、少子化はあつという間に解決しそうに思うのは短絡的過ぎますが、この国の未来を担う若者がこの先増えていくよう、まずは議員の半分が女性になるよう、女性達よ立ち上がれ!と叫びたいです。



映画鑑賞報告

「出産の自由を求めて」



ハンガリー映画



ハンガリーで約10年程前におこった実話です。産科医で助産師の、アグネス・グレープさんは3000件以上の自宅出産を介助していた方ですが、ハンガリー当局から起訴、逮捕されたのです。

そもそも産婦人科医として働いていたアグネスさんですが、ハンガリーの病院では階級があり、医師が偉く、助産師や看護師は召し使いのような立場で(時代錯誤も甚だしい!)、医師の指示は絶対、看護師や助産師が意見をほとんど言えないそうです。そんな状況下でもアグネスさんは医師の立場で助産師や看護師と対等に接していたというだけで、医師免許を剥奪され、以降は助産師として地域で自宅出産にかかわるようになったそうです。しかし、自宅出産をよしとしない、当局に目を付けられ、逮捕、投獄されたのです。獄中のアグネスさんを思い、たくさんのママやパパたちがデモをしたり、刑務所の前で集まり、アグネスさんに届くよう歌ったりと、「出産の自由と、助産師に介助される権利を求めて」運動を展開していったのです。



(病院以外で、自宅で産む権利がある)と判決をくださったのです。

民主主義の国(ハンガリーは1989年まではソビエト型社会主義国)でそんなことがおこっている事に驚きました。“正常なお産”と条件付きではありますが、自宅や助産所のお産が認められている日本では考えられないことなのですが、はて、そうなんだろうか? 日本の医療機関のお産はどうなんだろうか? 女性は自分で産み方を選び満足できるお産を経験しているのだろうか? と、ふと考えさせられました。医療機関でのお産が99%の状況は、その99%の女性が助産所のお産を知ったうえで医療機関を選んだのだろうか? と思ってしまいます。助産所に来るお母さん達が時々「助産所で産めるんですね!」「こんなお産があったんですね!」と助産所出産に驚きの反応を示されることが多々あります。「えっ、知らないんだ。ネットでいろんな情報が瞬時に手に入る時代なのに・・・」とこちらも驚いてしまいます。だからといって自分が選んだ医療機関でどんなお産がされているのかもあまり知らなくても平気、興味が無いようです。医療機関が代わりに産んでくれるわけでも、産ませてくれるわけでもなく自分が産むのです。ハンガリーのように自宅出産全否定の国ではないのですから、色んなお産があることを知った上で、自分はどんなお産がしたいのか?



そして、アグネスさんに自宅でお産を取り上げてもらった1人の女性が立ち上がり、2010年に欧州人権裁判所にアグネスさんの逮捕を不当だと主張して、訴えたのです。結果、「勝訴」。欧州人権議会は「女性はどこで誰と産むか、自分で決める権利がある」



まず考えてほしいです。

映画の中では赤ちゃんやお母さんを助けるためと鉗子分娩や吸引分娩、会陰切開、帝王切開、誘発分娩、いくつもの医療介入が、(必要なときは助かるけれど)必要がないときにも積極的にどんどん行われていたり、医学的に必要のない処置を強要されたり、



拒否すると胎児虐待と称し、出産後に子どもを児童施設に送るぞと脅されたり。女性の人権はどこにあるの？目を疑うばかりでした。

女性は命をかけて子どもを産むのです。だからこそ、自分の体について自分で決める権利が、女性にはあると思います。欧州人権議会の正しい判決が世界中の女性に届く事を強く願います。



ドキュメンタリー映画



産科医でも小児科医でもなく、科学者たちが常在菌の角度から、経膈分娩と帝王切開のありかたについて、10年前に研究発表した映画で、スポンサーをあえてつけずに寄付金で作られています。

人間の体には身体を作っている細胞よりも多い数の菌(微生物)たちがいるそうです。その菌は人間の健康に欠かせなく、菌達のお陰で元気に過ごしているそうです。皮膚にも常在菌がたくさんおり、皮膚を守ってくれています。しかし、現代人の体の菌は、大きく減ってきており、私たち人類が、健康に生きるために、祖先から脈々と受け継いできた常在菌が失わつつあるそうです。そのような常在菌をどのようにして受け継いで来ていたのか？その方法として、近年、微生物学や遺伝学の分野で注目されているのが「出産」です。「母親から次世代へ良性細菌を受け渡す大切な機会」ととらえる研究が急速に進んでいます。



赤ちゃんはお母さんのお腹の中で無菌状態で育ちます。そして、出産の時に産道を通りながら母親からたくさんの微生物、菌をシャワーの様に浴びてゆずり受けるそうです。その菌は赤ちゃんの体や消化器官をおおい、赤ちゃんの健康を守るのです。出生直後は無かった腸内細菌も3~4時間後には菌が出現し、その菌が哺乳で急激に増え、1週間ほどで安定した菌叢を形成すると言われています。つまり、お母さんの産道を通り、産後直ぐに抱っこされて皮膚のふれあいを受ける事は非常に重要で意義のあることなのです。



又、母乳を少しでもいいから最初に赤ちゃんが飲めると、消化器官内に広がって、腸を保護してくれるのだそうです。そしてもう一つ、母乳の中には赤ちゃんが消化できないオリゴ糖が何故含まれているのか？その役割は腸内細菌の餌になるそうです。母乳中のオリゴ糖を餌として腸内細菌が増殖し、腸内細菌叢を形成を助けているのです。

出産や母乳は生理的現象です。人間が健康で生きていけるように仕組まれた自然の摂理なのでしょう。



「マイクロバース」

この映画は、経膈分娩や母乳育児の意義と、それができない場合に別の方法(帝王切開)で補う方法を追求する最先端の研究者らの試みを追ったドキュメンタリーです。帝王切開でも母親の膈にじゃばらに折りたたんだガーゼを1時間前から入れて置き、赤ちゃんを出す直前に母親の膈からガーゼを取り出し、赤ちゃんが外界に出た瞬間にその口や顔、体をそのガーゼでふくことで、菌をプレゼントできると言っています。



現代人は体の菌や微生物が3分の1まで減少してきているそうです。より清潔にを求める余り、除菌や抗菌グッズが増えています。口にすると食材も抗生物質漬けされた家畜や養殖魚、農薬が撒かれ虫も食べないようなきれいな葉の野菜ばかり。風邪を引いても抗生物質が処方され有り難く服用、薬がないと治らないと思いついていませんか？清潔にすることや細菌感染症に必要な抗生剤を的確に使うのは重要ですが、必要以上は悪くなるのです。抗生物質は、小腸や大腸に共生している善玉の腸内細菌まで殺す恐れがあります。腸内細菌は、健康の維持にとってきわめて重要な存在であり、

腸内フローラ(腸内細菌叢)が乱れると、肥満や便秘、下痢のみならず、不安症やうつ病、糖尿病、神経変性疾患の発症リスクを高めてしまうと言われています。それから、腸内環境は免疫力と深いかわりがあるため、善玉細菌が減少すると、かぜを引きやすくなったり、ウイルスに感染しやすくなるそうです。常在菌や腸内細菌がいかに私たちの健康を守る重要な役割を果たしているのかがわかります。

どんな方法で生まれてきても親の健康な細菌や微生物のプレゼントが受けられ、一滴でも母乳が与えられるべきと思いました。

「出産の自由を求めて」「マイクロバース」どちらもネットで上映会の紹介したり、ZOOM配信可能な時もあります。興味のある方は是非ご覧下さい。



3月のお産子の家定例イベントは www.osanko.com を各おっぱい塾開催日は biwakooppajuku.blog70.fc2.com/ を

